

世界の湿地を守るラムサール条約に登録された 立山弥陀ヶ原・大日平湿原

太田 道人 (富山市科学博物館)
佐藤 武彦 (環境省自然公園指導員)

国際的に重要な湿地を守っていく「ラムサール条約」に、立山弥陀ヶ原・大日平が2012年7月3日、富山県内ではじめて登録されました。登録地の大部分は亜高山の湿原となっていて(表紙写真)、日本の登録湿地の中では最も標高の高い場所のものとなりました。

登録湿地となったことで何がどのように変わるのでしょうか。条約が目指していることや国際的に重要な湿地の意味、さらに立山弥陀ヶ原・大日平の自然の特徴などについてご紹介します。

■ラムサール条約とは

湿地を守ることを取り決めた国際的な約束です。湿地とは湖や池、湿原、水田、干潟など、常に水でうるおっている場所のことです。湿地には多くの植物が生育するほか、昆虫類や魚類、両生類、哺乳類、鳥類、菌類、細菌類などがいて、たがいに複雑に関係しあってその地域独自の生態系を作っています。



図1 国境を越えて渡りをするオオハクチョウ
(撮影地:富山市)

条約の正式な名前は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といいます。湿地の生態系の中でも、ハクチョウやカモ、シギ、チドリ、サギなど水鳥の多くは国境を越えて渡りをするので、経由する国の湿地が減ってしまうとたいへん大きな影響を受けるおそれがあります。そこで、世界中で協力して動植物にとって大事な湿地を守ってこうと、1971年にイラン北部のカスピ海沿岸の湿地の広がる町ラムサールでこの条約が結ばれました。

条約の効力は1975年に始まり、日本は1980年に加盟しました(条約は国内においては法律と同じ効力をもちます)。2012年8月6日現在の加盟国数は162カ国。登録されている湿地の数は世界に2046カ所あり、この中に日本の湿地が46カ所含まれています(表1・図2)。

国内の有名な登録湿地としては、国内最大の湿原でタンチョウの生息地でもある北海道「釧

表1 世界の主なラムサール湿地
(2012年8月6日現在)

湿地の名前	国
ローモンド湖	イギリス
レマン湖	スイス・フランス
ドニャーナ国立公園	スペイン
オカバンゴ・デルタ	ボツワナ
エバークレース国立公園	アメリカ合衆国
パンタナール自然保護区	ブラジル
ラグナ・コロラダ	ボリビア
ウッド・バッファロー国立公園	カナダ
ヒガンスキー自然保護区	ロシア
大連ゴマフアザラシ自然保護区	中国
キナバタンガン川 ・ヤガマ川下流域湿地	マレーシア

など 2046カ所

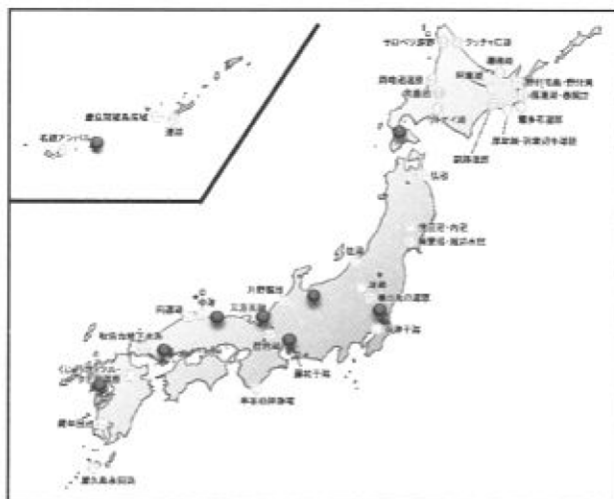


図2 日本のラムサール湿地
2012年8月6日現在、46カ所。大きめの●印は
2012年7月3日に登録された9カ所。
(環境省パンフレット「ラムサール条約と条約湿地」
2007.3に加筆)

路湿原」やマリモで有名な「阿寒湖」、日本最大の湖でそこだけにしかない魚の種類が多い滋賀県の「琵琶湖」、福島・新潟・群馬県にまたがる本州最大の高層湿原「尾瀬」などがあります。

■立山弥陀ヶ原・大日平が登録された理由

立山弥陀ヶ原・大日平(図3、4)は訪れる水鳥こそ少ないですが、「餓鬼の田」と呼ばれる小さな池が1000個以上点在する広大な亜寒帯性の湿原があること、国指定の特別天然記念物で

絶滅危惧種のライチョウや国内希少野生動物種のイヌワシ、ハヤブサなどの生息地となっており、希少な植物や昆虫がいることなどが重要であるとされて、2012年7月3日に新たにラムサール湿地の仲間入りをしたのです。

■自然の特徴

立山弥陀ヶ原・大日平は、3000m級の高山から続くなだらかな弥陀ヶ原台地の上に広がっています(図5)。台地は立山火山が10万年前から何度か噴火した時に出た火山灰や軽石が大量に積もってできた斜面で、東から西に向かって約12km続いています。溪谷を流れる水は台地の末端で日本一の落差(350m)をもつ称名滝となって落ちていきます。

登録された範囲の標高は、中心部分が約1800mで、最も高い所が天狗平の下で2120m、最も低い所が称名滝の下流側で1040mです。亜寒帯にあるゆるやかな斜面が年間5000mmをこえる降水量(半分以上は雪)にうるおされることで、その大部分は雪田草原*と呼ばれる湿原になっています。斜面と溪谷には針葉樹林が育っています。

*初夏まで解け残っていた残雪が消えた後にできる草原

雪がとけた夏の弥陀ヶ原はとても開放的です。

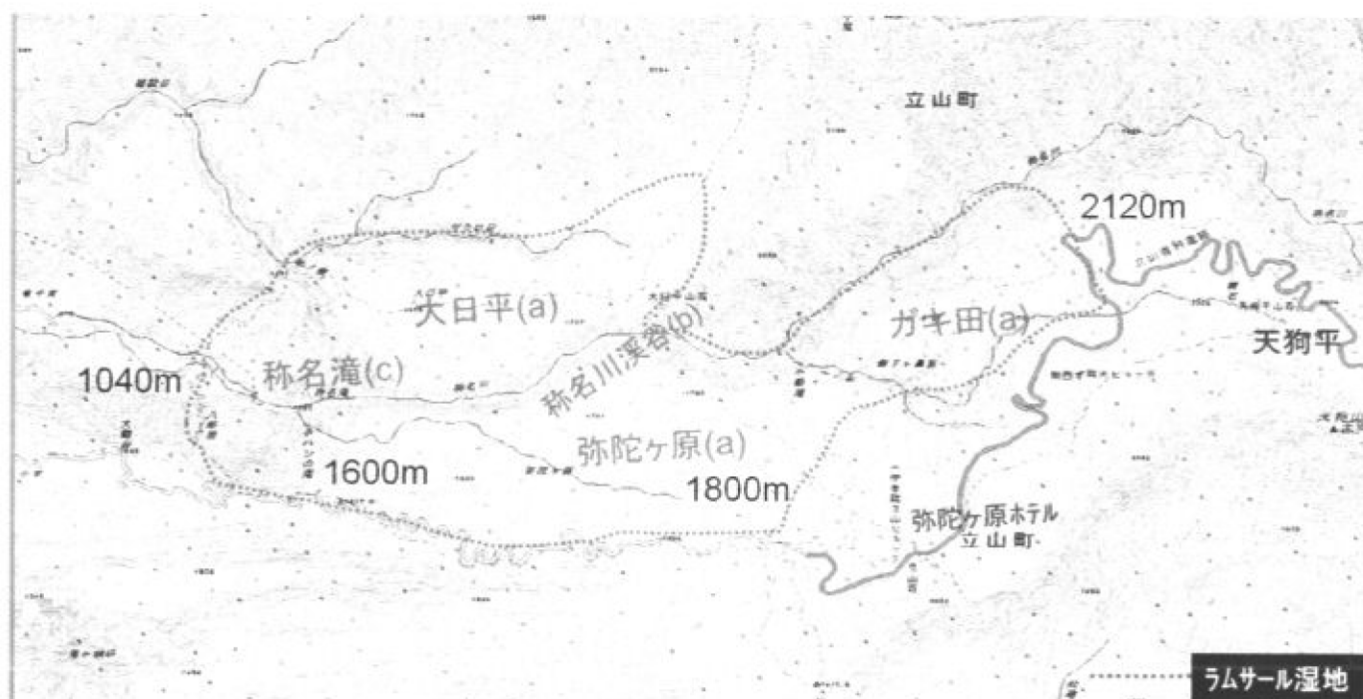


図3 ラムサール条約登録湿地となった範囲 東西約3km、南北約1.5kmの範囲で面積は574ha。



図4 雪田草原に点在する「餓鬼の田」
後方は大日岳。

餓鬼の田が点在する広大な草原は、ワタスゲやゼンテイカ、イワショウブなどの花に次々と彩られていきます。夏鳥のメボソムシクイやルリビタキ、コマドリなども元気に活動し、上空をハヤブサやハチクマなどの猛禽類が舞います。

秋は白く雪化粧した山々を背景にナナカマドやヤマウルシの赤色、ダケカンバやヌマガヤの黄色、オオシラビソやチマキザサの緑色が織りなす鮮やかな紅葉絵巻が圧倒的なスケールで展



図6 ワタスゲ
細長い茎の先に白い綿のような実をつけるスゲの仲間。



図5 3000m級の高山から続く弥陀ヶ原台地
手前は称名滝。

開します。

一転して冬の弥陀ヶ原は強烈な風雪に閉ざされます。平坦地には5m～6mの雪が積もりませんが、北西からの季節風が強く当たる丘の上ではわずか1m、吹きだまりとなる谷底では20mを超えます。この結果、平坦地には湿原、丘にはハッコウダゴヨウの低木林、谷底の岸壁にはサンカヨウやミヤマシシガシラなど日本海側の多雪地特有の植物が育っています。



図7 ゼンテイカ
夏の草原を華やかに彩る多年草。
1つの花は2日間咲いています。別名ニッコウキスゲ。



図8 イワショウブの花と実

小さな白い花がブラシ状に集まって咲きます。
白い花弁はやがて赤くなります。
茎をさわるとべとべとします。

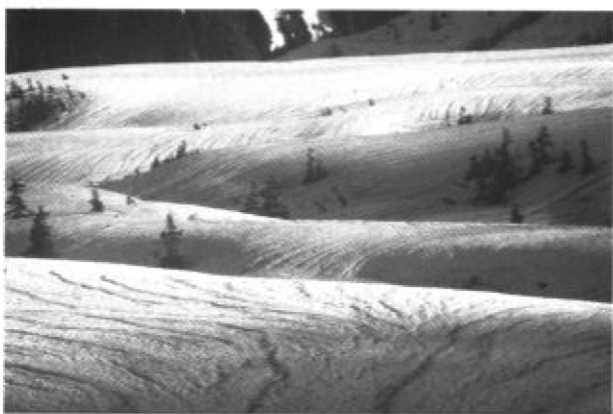


図9 早春の弥陀ヶ原

場所によって積雪量が大きく異なることが、春が訪れる時期の差となって現れます。

地形のちょっとした凹凸でも、多量の雪と季節風が加わることで積雪量に大きな偏りができ、これが雪解け時期の差となって植物に影響するので、場所ごとの植生の違いが際立ってくるのです。地形と気象条件の様々な組み合わせがあることが、弥陀ヶ原・大日平の自然環境のベースとなっていて、この地の生物多様性を支えています。

ラムサール条約に登録されたエリアは、もと中部山岳国立公園の特別保護地区であることに加え、国指定鳥獣保護区（弥陀ヶ原は国指定鳥獣保護区立山特別保護地区）、称名滝は国指定名勝天然記念物と、すでに厳重に保護されているので、登録を境に制約が増えることはありません。

■ラムサール条約登録湿地として目指すこと

ラムサール条約に登録されたことは、立山弥陀ヶ原・大日平が、世界の人と協力して守っていく湿地の仲間入りをしたことになります。

ラムサール条約が目指しているのは、湿地の自然環境を守りながら、その価値がなくならないように賢く利用していくことです。湿地のことを学習する機会を増やしていくことも求めています。

この登録を機に、国際的に注目度が上がって観光に来る人が増えることでしょう。どうすれば湿地の環境を守っていけるのかみんなで考えることが大事です。湿地の一部をつぶしたり動植物を採ったりすることのないようにするのはもちろん、訪れる人に心地よく自然に溶け込んでいただき、楽しい体験をしてその場所を大事に思ってもらうことも自然を守る力になっていくでしょう。みなさんもぜひ弥陀ヶ原を訪れて、変化に富んだ景色や花のきれいな高山植物、生き生きとした動物に出会って、「初めて見た！」体験をしてください。立山には、自然を案内してくれる人がたくさんいるのも心強いですよ。



図10 弥陀ヶ原を訪れた人に自然解説をしてくれる
富山県自然解説員（ナチュラリスト）

おおたみちひと・さとうたけひこ